

交尾期のものも含めて、オスとメスとの個体間関係をグルーミング以外にも指標をとり、性行動との関係を分析してゆきたい。

3. 結果7で述べたように、交尾にまで進めようとする行動には、非交尾期にも類似した行動が見られているものがある。それらは交尾期における性行動とどういう関係をもつものなのか、そしてそれらはどういう意味をもつものかを観察、分析することが必要である。

参 考 文 献

水原洋城 (1957) : 日本ザル, 三一書房, 京都。
 徳田喜三郎 (1958) : 幸島のサル, その性行動。今西 編 日本動物記 3 光文社, 東京。
 Tokuda, K. (1961-2) : A study on the sexual behavior in the Japanese monkey troop. *Primates* 3 : 1-40.
 Hanby, J. P., L. T. Robertson and C. H. Phoenix (1971) : The sexual behavior of a confined troop of Japanese macaques. *Folia Primat.* 16: 123-143.

湯河原の野生ニホンザルの心理学的研究

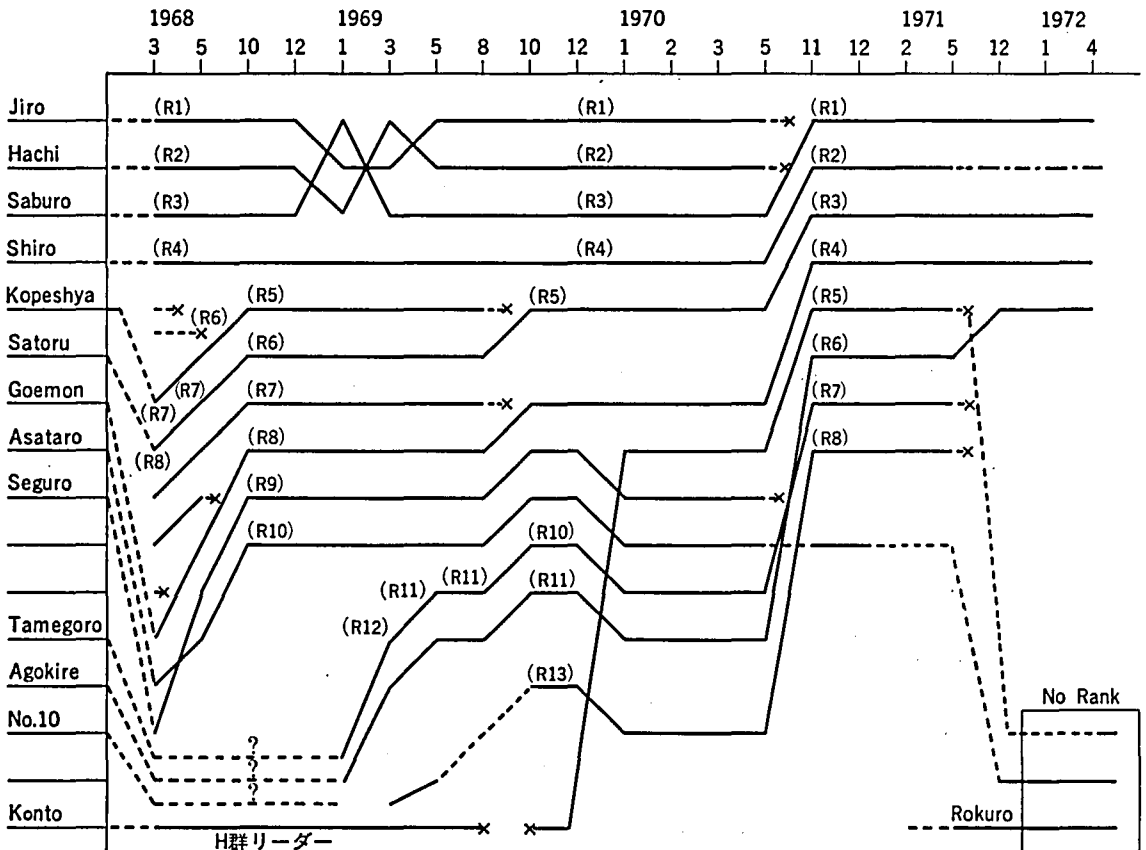
岡野恒也 (静岡大・教養・心理)

神奈川県湯河原町天照山の野生ニホンザルの群れを中心に、1970年度と同様の研究を行なった。

1) adult male の順位の確認: 1971年5月と12月の主な adult male の順位を第1表に示す。表中 *印は、

第1表 1971年5月と12月における adult male の順位

順位	5 月	12 月
1	Saburo	Saburo
2	Shiro *	Satoru
3	Satoru	Goemon
4	Goemon	Agokire
5	Kont *	
6	Agokire	
7	Tamegoro *	
8	No.10 *	



第1図 1968年より1972年にいたる adult male の順位の変動。

例年の夏季の遊牧中に群れから離脱したものを示す。なお、5月の順位は、1970年12月の順位（1970年度報告書表1）と同じである。

第1図は、村松、福田の資料を参照して、1968年より1972年にいたるまでの adult male の順位の変動を図式的に示したものである。表中×印は群れよりの離脱を表わす。なお Asataro はP群の leader 2位であったのが1968年3月、群れを離脱してT群に加入したものである。その後P群からは1970年8月、Rokuro が離脱し、1971年8月には Chan と Michio が、同年10月には Chin と Pon が離脱し、これら5頭は1群をなしてT群の周辺にある。

2) adult male の behavior pattern の測定：昨年度と同様の方法で8頭の adult male について、15種類の行動を測定した。昨年度は eating, walking, attack, defence の4つの軸上に行動型を表現してみたが、今回は eating, walking, looking の3つの軸上に表現してみた。昨年度と比較するために、1位の Saburo と2位（昨年度3位）の Satoru について示したのが、第2図である。両者とも三角形の形は昨年と今年とでほとんど変わらない。

3) 母—子関係の測定：母—子間の距離をA) 母が子をつかまえている状態、B) 50cm 以内、C) 1m以内、D) 3m以内、E) 3m以上、の5段階に分けてその頻度を測定した。順位の明らかな上位5頭のメスについてAの頻度をみると、第2表のようになる。

昨年の結果では、1.5mを基準にとった場合、母親の順位と母—子間の距離には関係があるように思えたが、

第2表 メスの順位と母—子関係

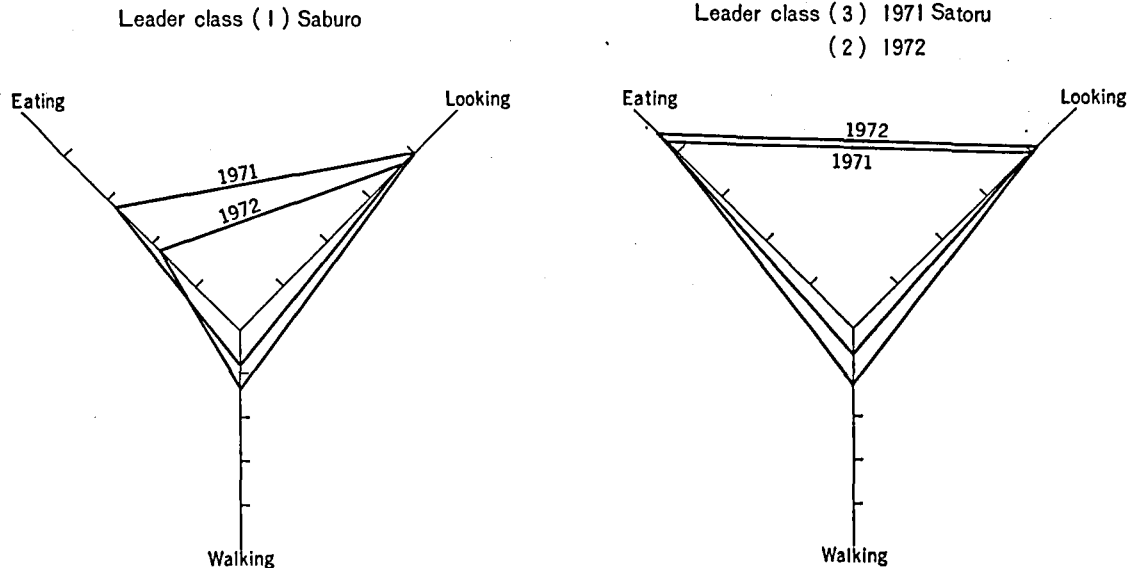
♀	順位	子の年齢, 性別	Aの%
Giroko	1	3.5才♀	35.8
Pandora	3	1才♀	4.2
Juno	4	3週間♂	16.7
Yuko	6	1.5才♀	8.3
Hidora	7	1カ月♀	35.8

今年の結果はそうでない。子の年齢, 性, 測定の場面及び方法によって結果は一義的でないことが考えられる。

4) population census : 昨年度とほぼ同じ時期、1972年3月、伊豆波勝崎の群れについて、昨年と同様の方法でマーキングを施し、41回にわたってその数を計測し、群れの大きさを推定した。41この [mm/k] の平均は131となり、昨年より6頭増えている。1971年の出産数は13頭であるから、7頭の誤差が生じている。

第3表 時間別・方法別にみた population の大きさ

時 間	測定回数	Population (平均)	
		全 体	中心部
9 : 00~12 : 00	21	130	139
12 : 00~15 : 00	11	141	163
15 : 00~17 : 00	9	142	195



第2図 adult male の behavior pattern の図式化の試み。

この結果は一定時間間隔で餌場に見ることのできる全ての個体を計測した値にもとづくものであるが、同時に餌場の中心部に一定の地域を設定し、その範囲内にある個体数の計測も行なった。この2つの数値から推測される群れの大きさを、測定の間隔別に示すと第3表のよう

3. 研究会

行動観察の基本的な方法と定量化の問題

期日：第1回 1971年5月24日
第2回 // 7月19日
第3回 // 9月11日
第4回 // 11月20日
第5回 1972年3月10日

参加者（固定メンバーのみ）：

森明雄、榎本知郎（以上京大・自然人類）、乗越皓司、川辺寿美子（以上大市大・生物）、水原洋城、都守淳夫（以上JMC）、糸魚川直祐、山口勝機、藤井尚教、杉野欽吾、南徹弘、黒川多嘉子、八島多恵子、鶴飼信行、曾我部宏（以上阪大・心理）、浅見千鶴子（お茶の水女大）、伊藤位一（藤沢薬品）、室伏靖子、渡辺允子、浅野俊夫、小山直樹、西邨顕達、三戸梅代（以上京大・霊長研）

以上の他に所外および所内より数名が随時参加された。

開催の契機とテーマ：

この研究会をもつに至った契機とテーマの設定の理由はつぎのようなものである。まず46年度設定課題「主としてニホンザルを対象とした行動の研究」では調査や観察の活動と平行して研究会がもたれるべきであるという意見がこの設定課題に関係した所内外の研究者の間であり、その際テーマは行動研究の方法論に関するものが適当であろうということであった（霊長類研究所年報 vol. 1, p. 89-92）。つぎに所外から阪大・心理学研究室の数名の方が「ニホンザル行動観察の方法—とくに集団と個体を対象とした場合の行動類型について」という題目で研究会を申請され、浅見千鶴子氏もほぼ同様の内容で研究会を希望された。このように行動に関する研究会を開くことは多くの人の希望からでたものである。この研究会の題目は所内の関係者で決められたが研究会の内容と進行の仕方は参加者全員が集まったところで決めていくことにした。

研究会の内容と進行：

第1回では西邨・浅野が「定量化」をめぐるつぎのような発表をした。

①西邨：野外および実験室における個体の行動および

になる。

この結果は、時間や餌の撒き方によって、餌場における個体の集中度が異なるためであると思われる。

これらの研究は、昨年同様、明星大学比較心理学研究会の学生諸君の協力によって行なわれたものである。

個体関係の recording, scoring および analysis の概観

②浅野：とくに Jensen et al. の方法論の紹介

これら2つの発表につづくディスカスの後、今後の会をどうやるかが話し合われた。その結果を要約すると、

1) 基本的な方法論の検討が重要であることの再確認、
2) 行動の研究では比較のための standard がはっきりしていない。私たちは共通の standard を求めて努力すべきであり、定量化はその1つである、
3) しかし、方法はできるだけ分散している方がよい、
4) 今年は「定量化」というようにテーマをせまくとらず、個人の現在かかえている問題をひとわり出してもらい、それを材料に会をすすめていくなから共通のテーマを追いかけよう。会の進行形式は今回と同じく2つの発表とそれにつづくディスカスということによい。

第2回以後の発表者と題目はつぎのようであった。

第2回

①水原：馬のり行動の発達

②乗越：ピーナツ、food getting 状況下でみられる野生ニホンザルの行動特性の群れ間比較

第3回

①都守：ニホンザルの性行動を観察して

②藤井：勝山野生集団の個体関係

第4回

①川辺：タイワンザル母子のコミュニケーションパターン—研究の方法とそのデータ処理、とくに生後1～2カ月のコドモと母親の関係について

②黒川：餌場退去時における勝山集団の分断操作実験

第5回

①室伏：サル仲間による社会的認知から共通の尺度を推定できるか

②榎本：交尾期におけるオス・メス関係—オスとメスの出会いより交尾に至るまでの行動の記載とそこに含まれる信号の明確化

研究会を了えて：

5回にわたる研究会を了えて参加者が等しく抱いた感想は、現在霊長類、それも主としてニホンザルを対象と